

「洗礼者ヨハネの証し」（ヨハネによる福音書一章一九〜二八節）

1 アドベント（待降節）の意味

教会の暦では、今日から年が改まり、新しい一年が始まります。新しい一年はアドベント（待降節）から始まります。四回のアドベントの日曜日をへてクリスマス（降誕節）です。

アドベント（待降節）とは、イエス・キリストが、世に来られるのを待つという意味です。

ですから第一にそれは、クリスマスの来るのを待つということです。それと共にアドベントは、いま天にいます、父なる神の右にいますイエス・キリストの再臨を待つという意味もあります。

クリスマスを待つということではアドベントはまさに喜びの時です。しかし再臨を待つということからすれば、この時は、むしろ、キリスト教の歴史では、昔から、悔い改めの時なのです。

『讚美歌2』には「待降・再臨・アドヴェント」という括（くく）りで、かなり多くの讚美歌が入っています。全体としては、待降、クリスマスを待つという讚美歌が多いようですが、アドベントに再臨を待つ意味も、悔い改めの意味もあることを考えて歌うのはとても有意義だと思います。

とはいえ、この時は、私どもにとつて、クリスマスを待つ喜びの思いが大きな時ではないでしょうか。もちろん去年のクリスマスから今年のクリスマスまで、喜びだけでなく、人としての悲しみも苦しみも、一人一人違つていても、経験せざるをえなかったことは、その通りです。しかしそれらすべてが、イエス・キリストの生と死の中であがないとられていること、その甦りと共に生きることが許されていること、救いの中に置かれていること、そのことにも、この時、私ども、深く思いをいたす時でありたいと思います。

クリスマス、キリスト・イエスの誕生とは、「光は闇の中に輝いている。そしてやみはこれに勝たなかった」（ヨハネ一・五、口語訳）という出来事です。それゆえクリスマスを待つこのアドベントのとき、私どもは、光を灯します。今日は、小さな光が一本灯りました。そしてそれがすべて灯るとき、クリスマスが来ます。光によってやみは、追い払われるのです。

こうしたことを考えると、昔の人が、一二月二五日に、主イエスが生まれたとしたことに改めて深い意義を感じます。

いうまでもなく、イエスの誕生日は、聖書には明記されていません。キリスト教が古代ローマ社会に浸透していく中で、人々は〈冬至祭〉にクリスマスを重ねて見るようになったのです。

闇が世界をおおい、光が消えかける時、それが冬至です。しかしそれはまた闇の一番深い底で、光がふたたび輝き始める時でもあります。イエス・キリストこそ、暗闇

に輝く光。光はやがて闇を追い払います。それは逆転しない。蠟燭が一本ずつ灯り、みな灯るとき闇はそこにもうないのです。

2 洗礼者ヨハネの証し

さて今日の聖書箇所、ヨハネによる福音書が〈洗礼者ヨハネの証し〉を伝えているところです。最初のアドベントの今日、この洗礼者ヨハネの証しを取り上げたいと思います。

〈洗礼者ヨハネ〉、〈バプテスマのヨハネ〉とも呼ばれるこの人は、イエスが宣教活動を始める頃に、ヨルダン川の低地、荒れ野に現れて、民衆に洗礼を授けることをしていた特異な人物です。

彼はすべての福音書に登場します。というよりも、聖書は、洗礼者ヨハネの働きをイエスの福音の宣教の始まりに位置づけています。イエスの宣教はヨハネの活動と切り離せないのです（使徒一〇・三七）。

洗礼者ヨハネのことは、マタイ、マルコ、ルカ、とくにルカによる福音書に、イエスとの関係もふくめて、歴史的事情など、詳しく書いてあります。これに対してヨハネによる福音書は、具体的なことには触れずに、イエスとの関係で本質的なことだけを書いていきます。

ヨハネ以外の福音書を参考に少し申し上げると、洗礼者ヨハネは、ザカリアという祭司の息子です。彼の母エリザベトとイエスの母マリアは、姻戚関係にあったようで、ヨハネはイエスより半年ほど早く生まれています（ルカ一章）。二人ははじめから関係が深かったといえると思います。

しかし、一足早く世に知られるようになったのは、洗礼者ヨハネです。荒れ野で生活し、その生活スタイルは、「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごの野蜜を食べていた」（マルコ一・六）というようなものでした。彼が語ったのは、神の怒りと裁きは差し迫っている、悔い改めよ、それにふさわしい実を結べというものでした。それはユダヤ全土を、例えば徴税人や兵士も含め、あらゆる階層の人びとを震撼させたのです（ルカ三章）。ヨハネのもとに話を聞こうとしてやってきた中に、ファリサイ派やサドカイ派の人もいました（マタイ三章）。その洗礼は悔い改めのしるしでした（ルカ三・三）。

そしてイエスも、このヨハネから洗礼を受け、福音の宣教に入って行ったことはご承知の通りです。ただし、イエスの洗礼のことはヨハネによる福音書では間接的に触れています（一・三二）。

いずれにせよ、これだけ見ると、洗礼者ヨハネこそ救い主、ユダヤの人々が待ち望んでいたメシアであるようにも見えます。実際、ヨハネの活動に、もしかしたら彼がメシアではないかと、多くの人が、心の中で考えていたという証言もルカにはありません（三・一五、ヨハネ三・二八参照）。

先ほど、ヨハネによる福音書は、イエスとの関係で本質的なことしか書いていないと申しましたが、その本質的なこととは、結局、洗礼者ヨハネはメシアではない、た

だメシアを証しし、指さす、その道ぞなえする者だということを際立たせていることです。今日の聖書箇所、福音書が、最初に明らかにしようとしていることは、そのことです。

さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた（一九〇二節）。

このやりとりから、色んなことが言えると思いますが、例えば、何よりも、エルサレムの宗教の権威者たちも、洗礼者ヨハネの活動に、並々ならぬ関心を寄せていたということなのです。

どういう関心か、ということは、彼らの問いの中に現れています。洗礼者ヨハネ自らメシアではないと言っていますが、「あなたはメシアか」とも、おそらく尋ねたのでしょうか。そして民衆が、終わりの日、主の日の前に現れると期待していたエリヤなのか（マラキ三・二三）、さらには、かつてモーセが言った、モーセのような「預言者」（申命一八・一五）なのか、とも尋ねたのです。ユダヤ人たちは、ここに登場する宗教の指導者たちも、そして民衆も、みな、主の日、新しい時代の始まり、その前兆に深い関心を寄せていました。

しかし、このやりとりで、もっと重要なことは、洗礼者ヨハネが、そうした問いをことごとく否定したことなのです。こうしてヨハネは、自分が〈何でない〉かを、はっきり語ったのです。

3 ヨハネの洗礼の意味

さてそれなら、洗礼者ヨハネは自分をどのように規定したのででしょうか。自分は〈何である〉と言っているのでしょうか。

そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか」。ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』」（二二〇二節）。

洗礼者ヨハネは、イザヤの預言の言葉に託して語っています。ヨハネは自らを「わたしは荒れ野で叫ぶ声」だと言っています。

少し後で（三・三〇）、洗礼者ヨハネが、イエス・キリストについて「あの方は栄え、わたしは衰えなければならぬ」と語っているところがあります。洗礼者ヨハネ

はやがて衰え、消失し、叫び声だけが「しばらくの間」（五・三五）響くのです。それが証人です。

有名な、グリユーネヴァルトの描いた、イーゼンハイムの祭壇画の、洗礼者ヨハネの「指」を思い起こします。不自然な形で長く伸ばされた人差し指、洗礼者ヨハネの全神経はそこに集中しています。この人を見よ！それが証人。かくて洗礼者ヨハネは自らを徹底して否定して、ただメシア・イエスを証しようとしたのです。同じように彼は荒野野の声になります。

エルサレムから洗礼者ヨハネのところに来た人たちは、なおも問うています。

遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼（バプテスマ）を授けるのですか」と言うと、ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたが知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない」（二四〜二七節）。

遣わされて来た人たちの質問は正当です。洗礼者ヨハネがメシアでもなければ、エリヤでもない、そしてあのモーセのような預言者でもない、主の日の到来、裁きの日の到来と、何の関係もないのであれば、それに向けて洗礼を授けるのは理由がないことです。

ヨハネの洗礼の正当性は、しかしそこから由来するものではありません。それは「わたしの後から来られる方」にあります（使徒一九・四）。したがって、こうして悔い改めの洗礼を授けることそのことが、メシアが来られることの証しであり、その道ぞなえそのものなのです。

洗礼者ヨハネは、自らの洗礼を「水による洗礼」であることを強調しています。旧約聖書は、水による洗礼、さらに聖霊の注ぎが神によって与えられることを語っています（エゼキエル三六・二五〜二六）。新しい霊が人間に与えられて、私どもが神の民となり、神が私どもの神となると語っています。これに対して新約聖書、そしてキリスト教は、水の洗礼と聖霊による洗礼とを分けて、後者は、まさにキリストによってそれがもたらされるとしたのです。

使徒言行録一九章に、エフェソでパウロが「ヨハネの洗礼」しか受けていなかった弟子たちに遭遇する場面があります。パウロは水の洗礼だけでは聖霊はいただけではないと言って改めて主イエスの名によって洗礼を授けます。パウロの時代になっても、ヨハネの洗礼しか受けていなかった人たちがいたのです。ヨハネの洗礼は水の洗礼であり、悔い改めの洗礼でした。しかし、イエスの名による洗礼、私どもの洗礼は、聖霊による洗礼です。救いの洗礼です。それによって聖霊の賜物にみなあずかることになる洗礼です。洗礼はこれからの方もおられるでしょう。その方々もふくめて、主の名による洗礼によって、私ども神の恵みの賜物にあずかっていることを感謝しながらこの新しい年も歩んでいきたいと願っています。

（十一月二七日）